＜日韓神学フォーラム・口頭発表原稿＞

芦名定道

１．＜挨拶・お礼＞

京都大学でキリスト教学を担当している芦名です。まず最初に、コメンテーターの韓国キリスト神学大学のイ・オガブ先生に感謝の意を表したいと思います。わたくしの原稿には準備する際の時間的な制約や字数制限などの関係上、必ずしも十分な説明ができなかった点が存在するにもかかわらず、丁寧なコメントをいただき、ありがとうございました。この後の討論の中で時間がゆるせば、コメントへの応答を簡単に行いたいと思います。なお手元の冊子掲載のイ・ジョンベ、キム・エヨン両先生の論文は、わたくしが省略した内容を補ってくれておりますので、合わせて参考にしてください。

さて、わたくしが発表のポイントとして強調したいのは次の点です。

２．＜宗教学的立場からという点について＞

わたくしは、原稿の最初の部分で、問題へとアプローチする自分の視点を、神学ではなく「宗教学あるいはキリスト教思想研究」と述べましたが、それは、次のような意図に基づいています。わたくしは、これまで、ティリッヒ、ニーバー、モルトマン、パネンベルク、マクフェイグなどの近現代のキリスト教神学思想を専門に研究してきましたが、その際に留意してきた点の一つは、キリスト教神学と隣接学問との関係性です。実際、プロテスタント神学は、シュライアマハー、ハルナック、トレルチらにとっての歴史学や倫理学、ティリッヒやパネンベルクにとっての存在論・人間学・科学論の役割からわかるように、常に様々な関連領域と密接に関係し合うことによって展開してきました。今回のフォーラムのように、キリスト教神学と民族主義との関係を問う上で、宗教学や文化人類学などの研究成果は重要な意味を持っています。しかし、現代のキリスト教神学は、周辺諸学問との生産的な関係構築に成功しているでしょうか。昨日の第一セッションでの西原先生の発表で強調されていた、公共性とは、こうした神学と諸学問領域との関係を含んでいるはずです。現代のキリスト教神学が閉鎖的な状況に陥っているとすれば、それは、神学が、民族、国家、正義、公共性、戦争・平和に関わる広範な現代思想の研究成果を十分に取り入れることを困難にしていると言えるでしょう。今回敢えて、宗教学という専門領域を明示したのは、以上の問題意識からです。

３．＜問題の単純化・図式化について＞

また今回の発表では、問題点を明確にするために、単純化をおそれつつも、日本と韓国との対比をおもいきって行いました。つまり、日本のキリスト教における民族的な伝統との断絶と、韓国キリスト教における民族精神との連続性です。不十分な点や誤解についてはぜひご指摘いただきたいと思いますが、わたくしの発表の意図は、日本のキリスト教と韓国のキリスト教は、それぞれ民族主義との関わりで問題を、しかもきわめて対照的な問題を抱えており、その解決はかなり本格的な取り組みを必要とするという点を強調することにあります。もし、韓国のキリスト教が民族との関わりで問題をもっていない、あるいはあっても解決済みであるとするならば、今回のフォーラムの問題設定はあまり意味のないことになるでしょう。しかし、ウォン・ジンクァン、イ・ジョンベ両先生の論文を読む限り、わたくしの議論も決して的外れではないようですので、少し安心いたしました。

４．＜民族主義、民族主義に関して＞

実際、民族という問題は、単純ではなく、十分な考察を必要とします。民族は自然的な関係の延長上に成立するものではなく、社会的想像力が作用することによって成立するという点で、民族は社会的な現実と言わねばなりません。したがって、民族とは決して自明で自然な所与の事柄ではなく、常に新たに構築すべき課題に属しているのです。東アジアの現実において、キリスト教は、どんな民族理念を形成しようとしているのか、あるいは様々な立場から取り組まれつつある新たな民族性の構築作業に、キリスト教はいかに参与しようとしているのかが、問われているのです。昨日のセッションでは、民衆、民族、帝国といった諸概念の理解が問題になりましたが、たとえば、わたくしの民族に関する理解は、基本的には、イ・ジョンベ先生と一致しているように思います。「民族固有の原型的思考」という意味での民族と「想像の共同体としての民族」の両者を一面的なものとして退けつつ、開かれたナショナリズム、文化ナショナリズムの方向性を模索するという点です。この点については、このフォーラムが終わった後になるかもしれませんが、一度徹底的に整理してみたいと考えています。

５．＜なぜ内村か＞

内村鑑三を取り上げる場合に、わたくしの問題意識は、キリスト教にとって民族主義との適切な距離や関係とはいかなるものであるのか、ということです。つまり、民族主義との断絶でも、また同一化でもない、もう一つ別の関係性の構築を試みる場合、内村鑑三における民族や愛国をめぐる思想展開の中に、こうした関係構築のための一つのモデルを見いだすことができる。これが内村に注目した理由です。とくに、日本語のレジュメの 46 頁の後半に示した、１から２、そして３に至る思想展開の意味と、その到達点とも言える、47 頁の引用文の思想です。もちろんこれは、われわれ現代のキリスト教思想研究者が直面する課題に対する解答を内村に見いだすことができるということを意味していません。しかし、近代化以降のキリスト教思想の担い手たちが我々と類似の問題に取り組み、貴重な参照に値する思想的な貢献をなしてきたことは正当に評価すべきであると思います。

（以上）

＜イ・オガブ先生のコメントに対して＞

第 4 点について。

韓国の東学に匹敵する、近代日本の宗教運動としては、江戸時代末から明治期に展開する神道系の宗教運動、つまり、天理教、金光教、黒住教、大本教などが挙げられる。これらは、近代化がもたらす社会変動に対する日本の宗教伝統の対応とも言えるが、日本のキリスト教はこれらとは、ほとんど接点を持つことができなかった。これは、わたくしが、日本のキリスト教が日本の民族的な宗教伝統と断絶していると述べた点と一致している。もちろん、キリスト教が、近代日本の教育、芸術（文学、音楽、美術など）、医療、福祉などに、かなりの影響を及ぼしたことは忘れることはできないが。